

第7章 消費地出土の天草式製塩土器

藤本 貴仁

はじめに

古墳時代、宇土半島や天草諸島の有明海沿岸地域などで用いられた天草式製塩土器は、大きく内湾する碗形の器の下部に細長い脚部がつくワイングラスのような形状を呈する(図1)。1950～1960年代、天草市五和町沖ノ原遺跡や宇城市三角町大田尾遺跡の発掘調査でその存在が明らかになったもので、九州地方で初めて確認された古墳時代の製塩土器として知られている[近藤1974, 五和町教委1984]。

熊本県教育委員会が1979年に刊行した熊本県の生産遺跡基本調査報告書[熊本県教委1979]では、製塩関係遺跡として10遺跡が掲載されているが、その後、資料が大幅に増加し、現在、天草式製塩土器が出土及び採集された遺跡は、宇土半島や天草諸島の上島及び下島北部沿岸、熊本平野などで、参考遺跡も含めて36遺跡にのぼる(図2, 表1)。主に宇土半島から天草諸島にかけての有明海沿岸部を中心に分布しており、天草諸島対岸の長崎市野母崎町脇岬遺跡でも確認されている[長崎県教委1993]。有明海沿岸地域での出土が目立つが、八代海(不知火海)沿岸でも、近年調査された葦北郡芦北町花岡木崎遺跡で比較的多量出土した天草式製塩土器が出土しており注目される⁽¹⁾。

過去、沖ノ原遺跡や大田尾遺跡、天草郡苓北町出来町遺跡など、天草諸島から宇土半島にかけての天草式製塩土器が出土する製塩遺跡の発掘調査が実施されているが、1978年実施の出来町遺跡の発掘調査[熊本県教委1979]を最後に製塩遺跡の発掘調査は行われておらず、当該地域における土器製塩の実態については未だ不明な点が多い。一方、消費地については、2000年を前後する頃から集落遺跡などで天草式製塩土器の出土が注意されるようになり、現在、21遺跡(推定含む)で確認されている(表1)。特に熊本平野の集落遺跡からの出土事例が増加しており、熊本市二本木遺跡群や石川遺跡、菊池市泗水町篠原遺跡などの熊本平野周辺から同北部にかけての集落遺跡でまとまって出土している[熊本市教委2007c, 植木町教委2002, 泗水町教委1998など]。これらの消費地には、脚部を欠失した天草式製塩土器、つまり天草式製塩土器の碗部のみが持ち込まれたことが明らかになっており、これらの製塩土器は、胎土の違いが示すように複数の生産地から消費地へ運ばれたことが判明している[藤本2007b・2011]。

ところで、このような消費地に運ばれた製塩土器について、岩本正二氏は、その移動の形態を製塩土器の機能により、運搬容器や精製容器、保存・貯蔵容器に分類し、製塩土器の機能にそれぞれ結び付いて移動した塩を消費の目的(用途)から、食用および調味料・食品加工用、工業用(製鉄炉の構築用、皮革のなめし用など)、各種の儀礼・祭祀用に分類した[岩本1980]。また、内陸部出土の製塩土器は、祭祀遺物や渡来系遺物と共伴する機会が多いことや、日常用とするには出土量が少ないなどの傾向が指摘されている[大林1997, 青柳2007]。その他、塩と馬匹生産との関連を指摘する意見もある。官牧の管理や運営、馬の飼育方法などについて規定した8世紀の史料『養老律令』『厩牧令』に記されているように、馬匹生産には塩が不可欠とされており、馬飼い集団の集落と目される大阪府四條畷市葦屋北遺跡では、馬埋葬土坑や多量の製塩土器が出土している[大阪府教委2010]⁽²⁾。

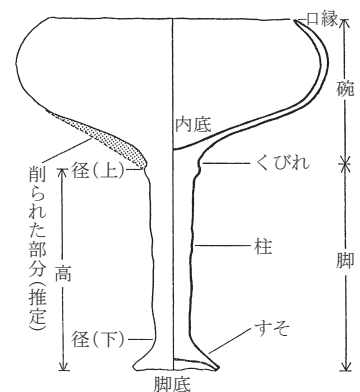


図1 天草式製塩土器模式図

本稿では、天草式製塩土器が出土した集落遺跡などの消費地の様相について概観し、その機能や用途などについて検討したい。主な対象地域は、発掘調査で資料の蓄積が進んでいる菊池川中・下流域や白川下流域、宇土半島基部地域を中心とする。なお、天草式製塩土器の碗部の分類については、拙稿〔藤本2009〕で示した分類（碗部1～3類）（図3）を用いる。

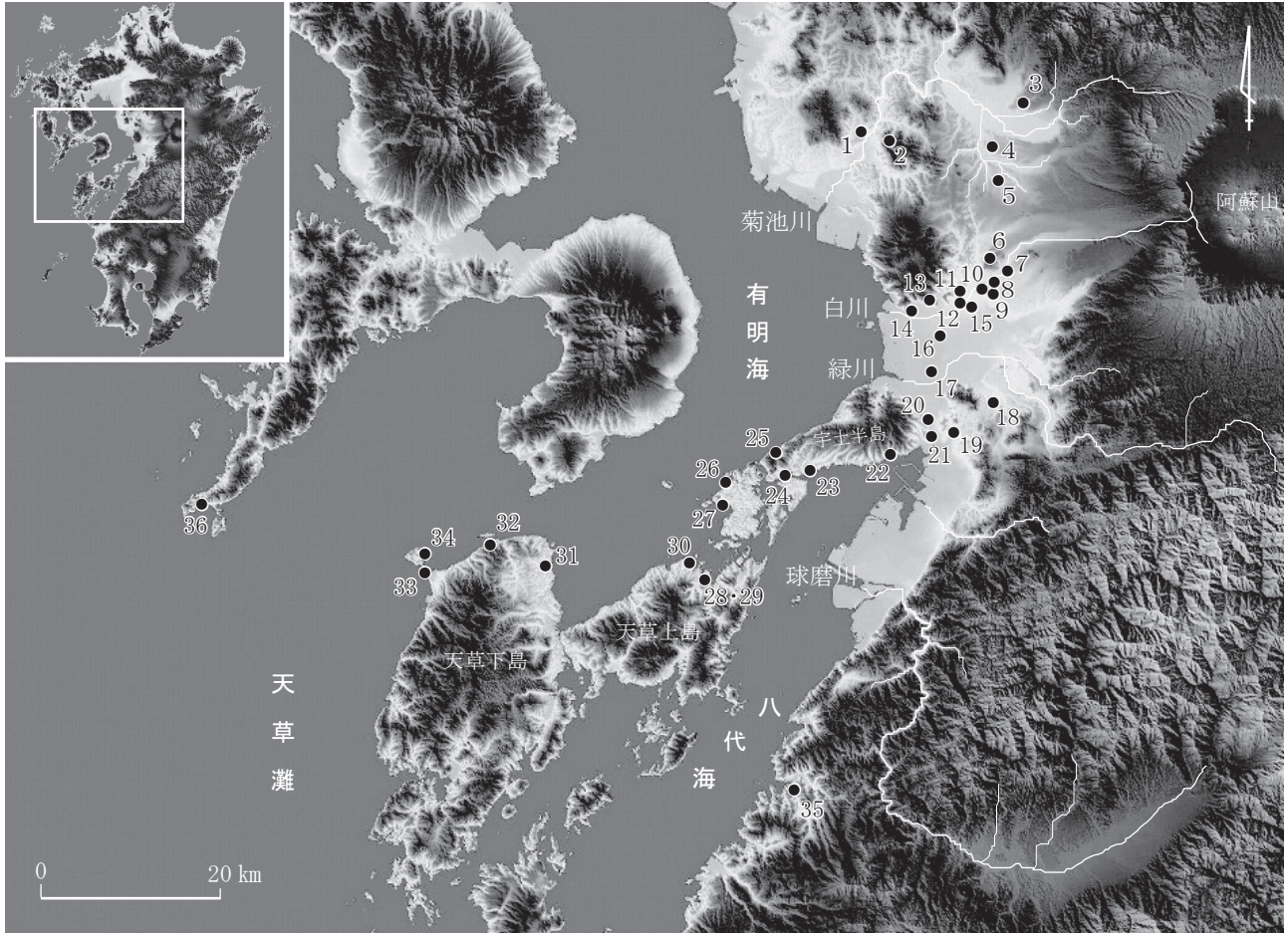


図2 天草式製塩土器出土遺跡分布図（番号は表1に対応）

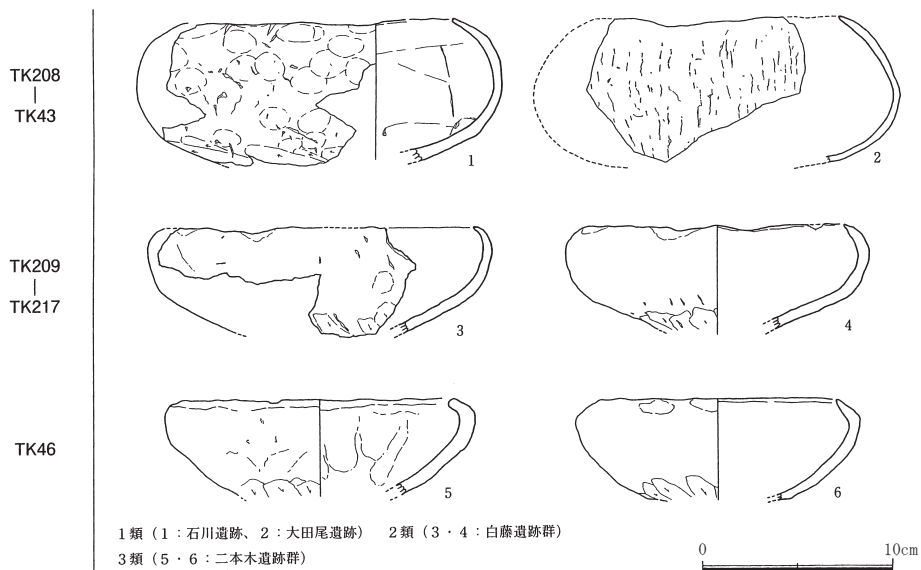


図3 天草式製塩土器碗部の編年

表1 天草式製塩土器出土遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種類	出土状況	出土部位	備考(文献、調査回数など)
1	玉名平野条里跡	玉名市両迫間	消費	竪穴住居(建物)跡	碗部	古閑前地区、熊本県教委2010c
2	稲佐津留遺跡	玉名郡玉東町	消費	包含層	碗部	熊本県教委2010a
3	鞠智城跡	山鹿市菊鹿町・菊池市木野	消費	貯水池跡、包含層	碗部	熊本県教委2012
4	篠原遺跡	菊池市泗水町	消費	竪穴住居跡	碗部	泗水町教委1998
5	石川遺跡	熊本市北区植木町	消費	竪穴住居跡、包含層	碗部	植木町教委2002
6	秣野遺跡	熊本市北区龍田	消費	包含層	碗部	
7	龍田陣内遺跡群	熊本市北区龍田陣内	消費	包含層	碗部	
8	渡鹿遺跡群	熊本市中央区渡鹿	消費	包含層	碗部	4次調査、熊本市教委2000・藤本2004
9	大江遺跡群	熊本市中央区大江	消費	竪穴住居跡	碗部	79・97・106次調査、熊本市教委2004・2007a
10	新屋敷遺跡	熊本市中央区新屋敷	消費	溝跡	碗部	25次調査
11	二本木遺跡群	熊本市西区二本木	消費	溝跡、土坑、包含層	碗部	13・16・31次調査、熊本市教委2007c・2011・2012
12	八島町遺跡	熊本市西区八島町	消費	包含層	碗部	
13	上高橋高田遺跡	熊本市西区上高橋町	消費	包含層	碗部	1・2次調査、熊本市教委1999a・藤本2004
14	上代町遺跡群	熊本市西區城山大塘	消費	包含層	碗部	1・2次調査、熊本市教委2007b
15	平田町遺跡	熊本市南区平田	消費	竪穴住居跡	碗部	3次調査
16	白藤遺跡群	熊本市南区白藤町	消費	土坑	碗部	3次調査、熊本市教委1999b・藤本2004
17	下江中島遺跡	熊本市南区富合町	消費	自然流路、包含層	碗部	熊本県教委2013
18	上の原遺跡	熊本市南区城南町	消費	住居跡?	脚部	松根2004
19	松橋大野貝塚	宇城市松橋町	生産?		脚部	採集資料、松根2004
20	南請遺跡	宇城市不知火町	消費	土坑	碗部	熊本県教委2010b
21	高良柳迫遺跡	宇城市不知火町	消費	包含層	碗部	熊本県教委2010b
22	黒田遺跡	宇城市不知火町	生産?			製塩炉? 参考遺跡、熊本県教委1979
23	小鹿里遺跡	宇城市三角町	生産?			参考遺跡、熊本県教委1979
24	塩屋浦遺跡	宇城市三角町	生産?			参考遺跡、熊本県教委1979
25	大田尾遺跡	宇城市三角町	生産	包含層	脚部、碗部	1964年発掘調査、近藤1974
26	串遺跡	上天草市大矢野町	生産		脚部	採集資料、熊本県教委1979
27	小波戸遺跡	上天草市大矢野町	生産		脚部	採集資料、熊本県教委1979・熊大文学部2007
28	台田遺跡	天草市有明町	生産		脚部	採集資料、隈2000
29	荒潮遺跡	天草市有明町	生産		脚部	採集資料、隈2000
30	白当遺跡	天草市有明町	生産		脚部	採集資料、隈2000
31	中ノ尾遺跡	天草市五和町	生産		脚部	採集資料、熊本県教委1979
32	沖ノ原遺跡	天草市五和町	生産	包含層	脚部、碗部	1959・1963年発掘調査、近藤1974・五和町教委1984
33	出来町遺跡	天草郡苓北町	生産	包含層	脚部、碗部	1978年発掘調査、熊本県教委1979
34	元袋遺跡	天草郡苓北町	生産		脚部	採集資料、藤本2007a
35	花岡木崎遺跡	葦北郡芦北町	消費	竪穴住居跡、土坑	脚部、碗部	
36	脇岬遺跡	長崎市野母崎町	生産		脚部	採集資料、長崎県教委1993

※未報告資料や報告書刊行後に資料の再点検で確認されたものなども含む。

1 天草式製塩土器出土の消費地遺跡

(1) 菊池川中・下流域

玉名平野条里跡(古閑前地区) 菊池川下流域の玉名平野中央部(標高約5m)に位置する。2007～2008年に実施された調査で、古墳時代後期の竪穴住居跡などから天草式製塩土器の碗部片が出土した〔熊本県教委2010c〕。竪穴住居跡SI017では、TK43～TK209型式の須恵器(坏身・坏蓋)、赤色顔料や黒色顔料が施された土師器(須恵器模倣坏・甕など)、ほぼ1体分とみられる馬骨、炭化米などとともに天草式製塩土器碗部1類が一括資料として出土しており、その出土品の内容からみて祭祀に関連する資料と考えられる(図4-1左)。また、小型の竪穴建物跡SI019では、土師器小型壺、土師器高坏転用輔羽口、鉄滓や砥石とともに製塩土器碗部片が出土しており、報告者は遺構規模が小型であることや出土遺物の内容から工房の可能性を指摘している(図4-1右)。

鞠智城跡 菊池川中流域の台地上(標高約145m)に位置する。7世紀後半、唐と新羅の列島への侵攻に備えて築城された古代山城である。熊本県教育委員会の長期にわたる調査で、掘立柱建物跡や礎石建物跡、土塁跡、貯水池跡などが検出されている。第8～32次調査報告作成に伴う資料の再点検により、天草式製塩土器の碗部が4点確認された〔熊本県教委2012〕。報告された資料2点のうち、貯水池跡から出土したものは碗部2類、包含層出土のものは碗部3類に位置付けられ、前者は鞠智城築城前の集落、後者は築城直後にもたらされた可能性がある。

篠原遺跡 菊池川中流域に位置する。菊池川の支流である合志川右岸の台地上(標高約40m)に立地し、

1997～1998年に実施された発掘調査で、TK10～TK43型式期（6世紀中頃～後半頃）の竪穴建物跡が11軒確認され、このうち10軒から総数350点ほどの天草式製塩土器の碗部片が出土した〔泗水町教委⁽³⁾1998、中原2007〕。これらは形態的特徴から碗部1類に相当するものである。TK10型式期のSI311は竈を有しており、南東の床面に赤色顔料の散布がみられ、土師器（須恵器模倣坏・壺・甑など）、須恵器（坏身・坏蓋など）、手捏ね土器、勾玉状の石製品、磨石、鉄滓などととも約180点、20個体相当の製塩土器が出土した（図4-2）。全て碗部片であり、遺構出土の天草式製塩土器としては最も出土量が多く注目される。

その他、SI303・304・306・308などで天草式製塩土器の碗部片とともに、土師器（須恵器模倣坏〔赤色塗彩・黒色塗彩含む〕・高坏・甕・壺・甑）、須恵器（坏身・坏蓋・高坏・甕・甑）、手捏ね土器、鉄鏃などの出土が報告されている。このうち、SI303では、土師器（須恵器模倣坏・壺・甑など）や須恵器（有蓋高坏蓋・甕など）のほか、土製模造鏡が出土している。SI304では、土師器（須恵器模倣坏・壺・甑など）、須恵器（坏蓋・坏身・甕など）、手捏ね土器、円盤状土製品、鉄鏃などのほか、故意に破損させたとみられる須恵器の甕が出土している。

なお、祭祀の後に用いた品を廃棄した地点と報告されている直径約2mの遺構からは、土製模造鏡や土製丸玉、手捏ね土器、軽石製石製品などが出土しているが、天草式製塩土器は含まれていないようである。

石川遺跡 合志川の支流・小野川右岸の台地（標高約74m）に位置する。1998～2000年に実施された発掘調査で、弥生時代から古代にかけての竪穴建物跡190軒、掘立柱建物跡5棟、土坑51基などの遺構が検出された。このうち古墳時代後期にあたるTK47～TK209型式期（6世紀初頭～7世紀初頭）に属する竪穴建物跡は29軒で、このうち11軒から破片総数約40点、計23個体分相当の天草式製塩土器の碗部片が出土した〔植木町教委2002〕。集落初現期のTK47型式期の10区7号住居跡では、赤色塗彩や黒漆の黒色塗彩が施された土師器坏や須恵器のほか、手捏ね土器、土製勾玉、滑石製勾玉、白玉、ガラス小玉、鉄製品（鋤先・袋状鉄斧）、焼成粘土塊などと共伴して天草式製塩土器の碗部1類が出土している（図4-3）。調査者の中原幹彦氏は、本遺跡では時期が新しくなるとこのような祭祀遺物は少なくなり、TK10型式頃になると典型的祭祀遺物は姿を消すと指摘している〔中原2007〕。

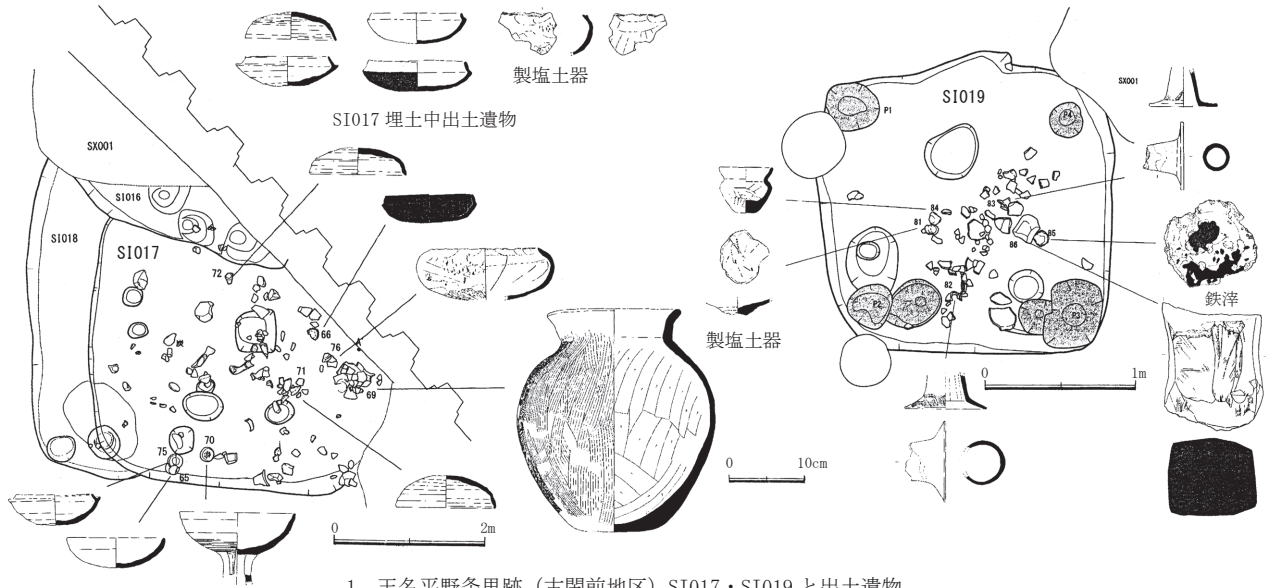
（2）白川下流域

渡鹿遺跡群 熊本平野を貫流する白川左岸（標高約20m）に位置する。4次調査の遺物包含層から天草式製塩土器の碗部2類が出土している〔熊本市教委2000、藤本2004〕。

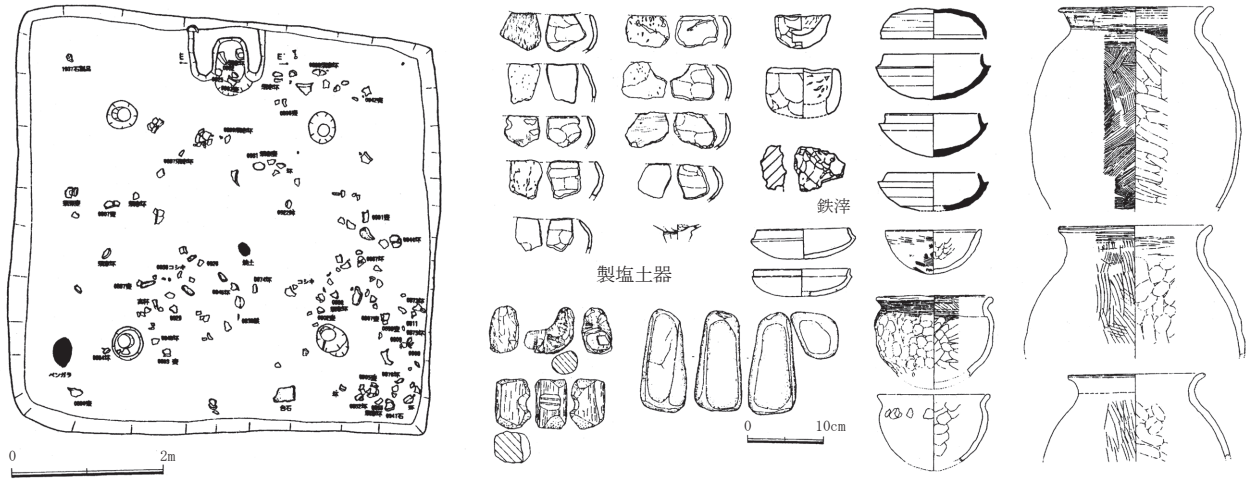
大江遺跡群 白川左岸（標高約15m）に立地しており、渡鹿遺跡群と隣接している。79次調査において、本遺跡群内の集落としては比較的早い段階の7世紀後半から8世紀前半に位置付けられる竪穴住居跡が12棟検出され、このうちSI02から天草式製塩土器の碗部片（碗部3類）が出土している〔熊本市教委2004、藤本2004〕。なお、79次調査以降では、97次・106次調査で天草式製塩土器の碗部片が出土している〔熊本市教委2007a〕。

二本木遺跡群 白川右岸の緩扇状地上（標高約10m）に位置している。13次調査A40（BC15）号溝跡から土師器や須恵器などとともに天草式製塩土器の碗部片が出土した〔熊本市教委2007c〕。当該遺構は、共伴土器から7世紀後半代に位置付けられ、出土した製塩土器は碗部3類に相当する。林田和人氏は、A40（BC15）号溝跡の出土遺物に祭祀行為を伺わせる遺物はみられないが、肥後において一般集落では出土例が少ない都城系暗文土師器とともに天草式製塩土器が出土している点に注目している〔林田2009〕。

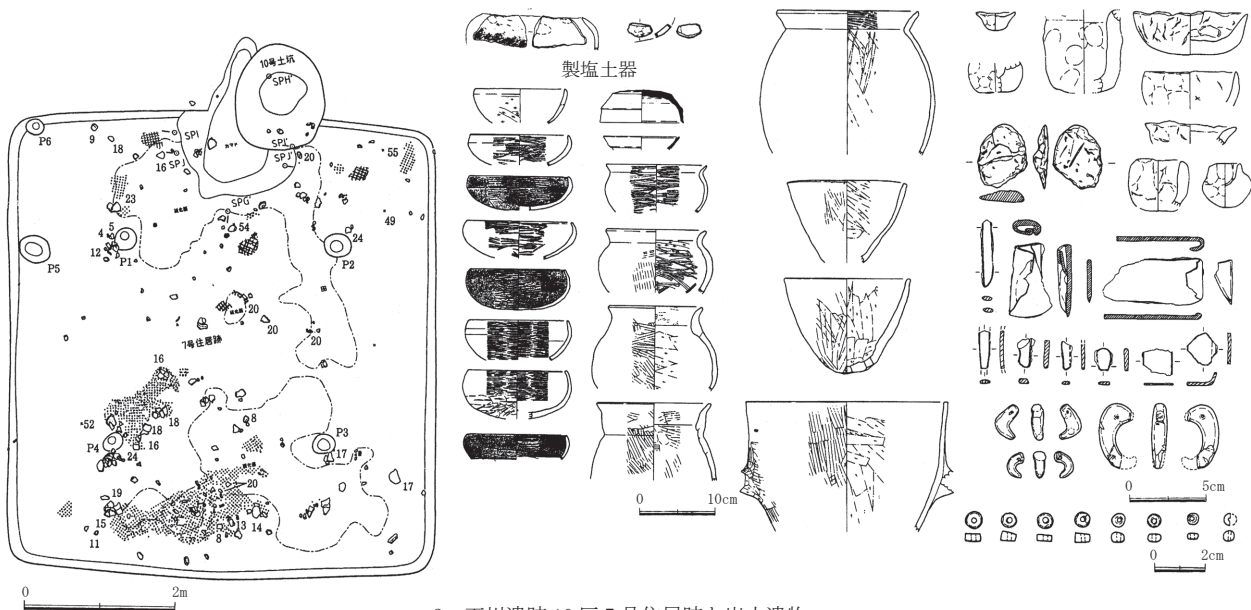
上代町遺跡群 熊本平野を流れる坪井川左岸の標高4～5mの自然堤防及び氾濫平野に位置する。現在は海岸線から距離があるが、弥生時代から古代までは有明海に面した微高地であったと考えられる。1次調査で、古墳時代の掘立柱建物跡1棟と土坑2基が検出され、当該期の遺物包含層から数多くの天草式製塩土



1. 玉名平野条里跡 (古閑前地区) SI017・SI019 と出土遺物



2. 篠原遺跡 SI311 と出土遺物 (手捏ね土器と鉄滓のみ 1/5)



3. 石川遺跡 10区7号住居跡と出土遺物

図4 遺構出土の天草式製塩土器と共伴遺物

器の碗部片が出土した〔熊本市教委 2007b〕。碗部 3 類を主体とするようである。なお、1 次調査区から数百 m 離れた 2 次調査地点でも天草式製塩土器の碗部片が出土している。

上高橋高田遺跡 白川の支流・井芹川によって形成された自然堤防上（標高 3～4m）に所在する。古墳時代の竪穴住居跡や井戸跡などが検出されており、後者では祭祀行為が確認されている〔熊本市教委 1999a〕。1・2 次調査の遺物包含層より天草式製塩土器の碗部片が出土しており、これらは碗部 2～3 類に相当する〔藤本 2004〕。その他の古墳時代の遺物として、土師器（ミニチュア土器含む）、須恵器、直弧文が刻まれた鹿角製柄飾りなどが出土している。

白藤遺跡群 白川旧河道の自然堤防上（標高 4～5m）に立地する。遺跡内に数多くの旧河道があり、それらに挟まれた狭い微高地に集落が形成されていたとみられ、3 次調査において古墳時代後期の遺物包含層が 3 層確認されている〔熊本市教委 1999b〕。TK209～TK217 型式期に位置づけられる 23 号土坑で、須恵器や礫などとともに天草式製塩土器の碗部片が少なくとも 3 個体出土しており、これらは碗部 2 類に相当する〔藤本 2004〕。

（3）宇土半島基部地域

下江中島遺跡 熊本平野南部を貫流する緑川の支流・浜戸川によって形成された標高約 2m の沖積平野に位置する。圃場整備で旧地形は失われているが、本来は自然堤防状の微高地が存在し、そこに遺跡が立地したと考えられる。2006～2007 年度の発掘調査で、掘立柱建物跡や溝跡、自然流路などが検出され、古墳時代後期を主体とする土師器、須恵器、木製品、天草式製塩土器の碗部片などが出土した〔熊本県教委 2013〕。製塩土器は自然流路を中心に比較的豊富に出土しており、その主体は碗部 1 類である。このうち、MT15～TK43 型式期の土器群がまとまって出土した 1 区自然流路 NR001 では、10 個体以上の天草式製塩土器の碗部 1 類が出土しており、出土須恵器の時期とも合致している。当該流路では、石列や敷板状痕跡が確認されており、人為的な造作が加えられていることが判明している。土器以外には、斧やえぶりなどの木製農具、祭祀具とみられる剣形や舟形の木製品など、比較的多くの木製品が出土している。

南請遺跡 宇土半島基部南側の標高 5m の低地に位置する。2006 年に実施された発掘調査で、竪穴住居跡や土坑、溝跡などが検出された〔熊本県教委 2010b〕。このうち、5 区では古墳時代後期に位置づけられる竪穴住居跡が比較的限られた範囲で重複した状態で検出されており、天草式製塩土器の碗部片が出土している。また、いずれも TK217 型式の須恵器が出土した 1 区不明遺構 SX002 や土坑 SK042 でも碗部片が出土している。

高良柳迫遺跡 宇土半島基部の山塊から派生する丘陵裾部（標高約 20m）に位置しており、約 300m 北側には南請遺跡が立地する。2002 年に実施された発掘調査で、柵列跡や溝跡、土坑などが検出されており、遺構外より製塩土器の碗部片が出土している〔熊本県教委 2010b〕。

2 天草式製塩土器出土遺構について

消費地の 21 遺跡で天草式製塩土器が出土しており、包含層出土や出土位置が不明なものも含まれるが、先にみたように遺構に伴う状態での出土事例も増加している（表 2）。以下では、一部繰り返しになるが製塩土器出土遺構ごとに分けて、共伴遺物の出土状況なども含めてその特徴についてふれてみたい。

竪穴住居（建物）跡 玉名平野条里跡（古閑前地区）、篠原遺跡、石川遺跡、大江遺跡群、平田町遺跡、花岡木崎遺跡などで確認されている。なかでも玉名平野条里跡（古閑前地区）や篠原、石川では比較的良好な資料が得られている。

表2 天草式製塩土器出土遺構一覧

No.	遺跡名	遺構名	遺構の種類	時期	出土部位	共伴遺物	備考
1	玉名平野条里跡 (古閑前地区)	SI017	竪穴住居跡	TK43～TK209	碗部	土師器(赤彩・黒彩の須恵器模倣坏含む)、須恵器、馬骨、炭化米	
2		SI018	竪穴住居跡	—	碗部	土師器	SI017より古い
3		SI019	竪穴建物跡	5世紀後半～6世紀?	碗部	土師器、高坏脚部転用輪羽口、鉄滓、手捏ね土器、砥石	工房跡の可能性
4	篠原遺跡	SI303	竪穴住居跡	TK10～TK43	碗部	土師器(赤彩・黒彩含む)、須恵器、手捏ね土器、土製模造鏡、勾玉状土製品	
5		SI304	竪穴住居跡	TK10～TK43	碗部	土師器(赤彩・黒彩含む)、須恵器、手捏ね土器、鉄鏃	
6		SI306	竪穴住居跡	TK10～TK43	碗部	土師器(赤彩含む)、須恵器、手捏ね土器、刀子	
7		SI308	竪穴住居跡	TK10～TK43	碗部	土師器(黒彩含む)、須恵器、手捏ね土器	
8		SI311	竪穴住居跡	TK10	碗部	土師器(黒彩含む)、須恵器、手捏ね土器、磨石、勾玉状石製品、鉄滓、鉄鏃	床面に赤色顔料
9	石川遺跡	10区5号住	竪穴住居跡	TK47～MT15?	碗部	土師器、手捏ね土器、鉄製品(穂刈鎌)、焼成粘土塊	
10		10区7号住	竪穴住居跡	TK47	碗部	土師器(赤彩・黒彩含む)、須恵器、手捏ね土器、焼成粘土塊、土製勾玉、滑石製勾玉、ガラス玉、鉄製品	
11		10区28号住	竪穴住居跡	TK47	碗部	土師器(黒彩含む)、手捏ね土器、鉄製品(鉄鏃・鉈)	
12		10区37号住	竪穴住居跡	TK47?	碗部	土師器(赤橙色・黒色処理含む)、須恵器手法土器、手捏ね土器、土製勾玉	
13		12区1号住	竪穴住居跡	TK209	碗部	土師器、須恵器、鉄製品(鉈)	
14		12区29号住	竪穴住居跡	TK10	碗部	土師器(赤彩・黒色処理含む)、須恵器、須恵器手法土器	宇城産須恵器
15		12区36号住	竪穴住居跡	TK209	碗部	土師器、須恵器、鉄片	
16		13区16号住	竪穴住居跡	TK10	碗部	土師器、須恵器、焼成粘土塊、鉄片	
17		13区28号住	竪穴住居跡	TK10?	碗部	土師器、須恵器、須恵器手法土器	
18	13区36号住	竪穴住居跡	TK10	碗部	土師器(黒彩含む)、須恵器、鉄製品(鉄釘)、鉄片	宇城産須恵器か	
19	二本木遺跡群	A40(BC15)号溝	溝跡	TK46	碗部	土師器(暗文土師器含む)、須恵器	13次調査
20	大江遺跡群	SI02	竪穴住居跡	7世紀後半	碗部	土師器	79次調査
21	白藤遺跡群	23号土坑	土坑	TK209～TK217	碗部	須恵器	3次調査
22	南請遺跡	1区SX002	土坑状遺構	—	碗部	須恵器	
23		5区SK042	土坑	TK217?	碗部	土師器、須恵器	

※調査報告書に基づき作成。8世紀以降の遺構出土事例(後世の流入と判断されるもの)を除く。

これらの竪穴住居跡からは、古墳時代後期における集落遺跡の出土遺物として一般的な土師器や須恵器が、ほぼ全ての住居跡から普遍的に出土している。これらに加え、手捏ね土器が比較的多く出土していることがあげられる。石川遺跡10区7号住居跡や同28号住居跡、同37号住居跡などでみられるように、天草式製塩土器が消費地に運ばれ始めるTK47型式期から既に共伴して出土しており、篠原遺跡の竪穴住居跡出土資料が示すようにTK43型式期まで継続するとみられる。

また、全体的な割合としては高くはないが、滑石製品や土製勾玉のほか、高坏脚部転用輪羽口や鉄滓などの鍛冶に関連する資料と製塩土器が共伴して出土する事例が確認されている。

先述のとおり、石川遺跡10区7号住居跡では、赤色塗彩や黒漆の黒色塗彩が施された土師器や須恵器のほか、手捏ね土器、土製勾玉、滑石製勾玉、白玉、ガラス小玉、鉄製品、焼成粘土塊などと共伴して天草式製塩土器が出土している。篠原遺跡SI311では、土師器、須恵器、手捏ね土器、勾玉状石製品、磨石、鉄滓などと多量の製塩土器が出土しており、同SI303では、土師器や須恵器のほか、土製模造鏡が出土している。これらは手捏ね土器と共伴しているものが比較的多く、祭祀行為との関連性を示唆するものといえよう。また、鍛冶に関連する遺物との共伴については、工房跡の可能性が指摘されている玉名平野条里跡(古

閑前地区）SI019 で、土師器、土師器高坏転用轆羽口、手捏ね土器、鉄滓や砥石とともに製塩土器が出土しており、篠原遺跡 SI311 でも鉄滓が出土している。

その他、玉名平野条里跡（古閑前地区）SI017 では、須恵器や赤色顔料・黒色顔料が施された土師器、ほぼ1体分とみられる馬骨、炭化米などとともに製塩土器が一括資料として出土しており、その内容から祭祀行為に関連する遺物と考えられる。

土坑 白藤遺跡群、南請遺跡、花岡木崎遺跡があげられる。白藤遺跡群では、TK209～TK217 型式期に位置づけられる 23 号土坑で須恵器や礫とともに天草式製塩土器の碗部片が少なくとも 3 個体出土している。また、南請遺跡では、TK217 型式の須恵器が出土した土坑 SK042 で製塩土器が出土している。これらの遺構からは、先述した竪穴住居跡のように手捏ね土器や石製模造品、土製模造品などの祭祀行為に関連するとみられる遺物との共伴は確認されていない。

溝跡 二本木遺跡群、新屋敷遺跡⁽⁴⁾で確認されている。二本木遺跡群では、13 次調査区 A40（BC15）号溝跡より天草式製塩土器の碗部片が比較的まとまって出土している〔熊本市教委 2007，林田 2009〕。

その他 遺構とは区別されるが、下江中島遺跡では自然流路から数多くの天草式製塩土器の碗部が出土している。比較的まとまって製塩土器の碗部が出土した 1 区自然流路 NR001 では、石列や敷板状痕跡が確認され、人為的な造作が加えられていることが判明しており、土器以外には、祭祀具とみられる剣形や舟形の木製品など比較的多くの木製品が出土している。

3 消費地出土の天草式製塩土器が示すもの

以上、消費地遺跡から出土した天草式製塩土器や出土遺構、共伴遺物などについて述べたが、その特徴について以下にまとめてみたい。

まず、消費地で出土した天草式製塩土器は、必ずといってよいほど碗部のみが出土する⁽⁵⁾。生産地で脚部を折り取って碗部だけを消費地に持ち込んだと想定され、6 世紀初頭には天草下島産の製塩土器、6 世紀中頃から後半には宇土半島産の製塩土器が流通を開始するとみられる〔藤本 2011〕。運搬効率を高めるため、塩の運搬に不必要な脚部を折り取ったとも考えられるが、畿内の消費地遺跡で大量に出土する小型丸底製塩土器のように極めて薄手で小型の製塩土器と比較して、器壁が厚く、比較的重量がある天草式製塩土器を塩の運搬容器とすることは、遠隔地に運ぶ方法としては非効率的といえる⁽⁶⁾。岩本正二氏は、製塩土器による塩の運搬は大量輸送の手段としては不相当とし、民族・民俗例より植物を利用した容器（籠、藁むしろの袋、俵など）の存在を想定している〔岩本 1980〕。塩の運搬容器として不適当な天草式製塩土器の碗部を、あえて消費地に運ばなければならない何らかの理由があったとみるべきであろう。

次に、消費地における天草式製塩土器の出土状況については、TK47～TK43 型式期（碗部 1 類）の 6 世紀初頭から後半までは菊池川中・下流域、TK209～TK46 型式期（碗部 2～3 類）の 6 世紀末から 7 世紀後半にかけては、白川下流域の集落遺跡を中心に出土している。また、出土遺構としては、圧倒的に竪穴住居跡からの出土が多く、集落遺跡内の数基程度の竪穴住居跡や土坑などから 1 から数個体分の製塩土器の碗部が出土する場合が多いことがあげられる。なかには、篠原遺跡 311 号住居跡のように多量の製塩土器が出土している特異な事例もあるが、基本的には塩が入った製塩土器を日常的に使用していたかのような出土状況を示す事例は確認されていない。石川遺跡では、検出された 29 軒の竪穴住居跡のうち 11 軒から、破片数約 40 点、計 23 個体相当の天草式製塩土器が出土しているものの、集落の存続期間が約 100 年間にわたることを考慮すれば、天草式製塩土器に入った塩を恒常的に使用していたとは考え難い。食用としての塩の消費を目的とし、製塩土器を運搬したと考えるには極めて少ない出土量といえる。

大田尾遺跡では、製塩土器層といえるような大量の天草式製塩土器が出土しているが〔近藤1974〕、このような多量の製塩土器が出土する生産地と先にみた消費地の状況とは極めて大きなギャップがある。つまり、製塩土器による塩の流通量は全ての塩の流通量のごく一部とみられ、生産地から消費地へ搬入された塩の大半は、生産地で製塩土器を割るなどして塩を取り出し、籠などの有機物の容器に入れ替えて運ばれたと考えられる。

最後に、天草式製塩土器と祭祀行為との関係である。前述のとおり、いずれも堅穴住居跡の玉名平野条里跡（古閑前地区）SI017や篠原遺跡SI311、石川遺跡10区7号住居跡などで祭祀行為に関連するとみられる遺物とともに天草式製塩土器が出土している。

天草式製塩土器と祭祀との関係を検討した中原幹彦氏は、石川遺跡や篠原遺跡などから出土した製塩土器と共伴遺物の分析を通じ、製塩土器が典型的祭祀遺物と共伴したり、少なくとも出土した場合は積極的に祭祀具として解釈すべきであろうとし、「製塩土器に入ったままの塩」を祭祀に用いる人々の存在を想定した〔中原2007〕。先述のとおり、製塩土器に入った塩が日常的に使用された形跡が認められないことや、祭祀遺物との共伴を重視すれば、中原氏の指摘のように製塩土器に入ったままの塩が祭祀行為に必要であった可能性も考慮されるべきであろう。実際、古墳時代後半期以降、列島において内陸部から出土する製塩土器の出土遺跡数やその量が著しく拡大した要因として、祭祀的用途の増加が指摘されている〔岩本1980〕。奈良県域では、古墳時代中後期において内陸に流通する製塩土器のほとんどが祭祀行為に用いられており、製塩土器に入れられた状態の塩が流通する需要のほとんどが、日常生活とは異なる祭祀行為に起因すると想定されている〔木本2003〕。古墳時代後期の肥後地域における消費地出土製塩土器のあり方は、このような列島の動きに対応していた可能性がある。

しかしながら、同時期の九州では、肥後地域や北九州市周辺の豊前地域を除いて製塩土器そのものの出土が少なく、日向地域や薩摩地域、大隅地域のように製塩土器の出土すら認められない地域も存在する〔藤本2013〕。肥後地域において、集落に製塩土器がさかんに持ち込まれるようになった経緯は現時点では明確ではなく、今後の検討課題といえる。⁽⁷⁾

おわりに

消費地出土の天草式製塩土器については、2000年代以降、古墳時代の集落遺跡調査などで注意が払われるようになり、九州新幹線建設に伴う調査で示されるように、古墳時代後期の集落遺跡ではかなり高い割合で出土することがわかってきた。また、過去に調査が実施された同時期の遺跡についても資料の再点検を行うことで、さらに資料が増える可能性がある。今後の資料の増加に期待したい。

本稿の作成にあたり、次の皆様に資料調査のご協力や有益なご教示などを賜りました。記して感謝申し上げます。
阿南亨、網田龍生、清田純一、中原幹彦、長谷部善一、林田和人、宮崎敬士（敬称略・五十音順）

註

- (1) 花岡木崎遺跡の調査を担当した熊本県教育委員会宮崎敬士氏のご教示で資料調査の機会を得た。花岡木崎遺跡では、堅穴住居6棟、土坑1基などから天草式製塩土器の碗部1類が出土している（2014年、報告書刊行予定）。
- (2) 馬飼い集団の故地である朝鮮半島では、土器製塩自体行われた形跡が認められないことから、馬の飼育に塩は欠かせないが、必ずしも製塩土器に入ったまま流通する必要はないとの指摘もある〔諫早2012〕。
- (3) 篠原遺跡の調査報告書〔泗水町教委1998〕では、天草式製塩土器を「手捏ねの土製品」として報告している。
- (4) 熊本市役所林田和人氏のご教示。

- (5) 熊本市立熊本博物館清田純一氏のご教示によれば、熊本市城南町上の原遺跡の発掘調査で検出された竪穴住居跡から天草式製塩土器の脚部が出土したという。
- (6) 畿内を中心に古墳時代中期以降に出現する小型丸底製塩土器は、器壁が非常に薄く（2mm前後）、軽いことから、遠距離の運搬容器とされる〔積山 2004〕。大阪府四条畷市葦屋北遺跡や泉南郡岬町小島東遺跡などから出土した製塩土器を実見したが、天草式製塩土器と比較にならないくらい小さくて大変軽く、これらを植物質の容器に集積して運搬していたと想定される。
- (7) 豊後地域では、古墳時代前期において内陸部の集落遺跡から倒壊形脚台をもつ製塩土器の出土が比較的早くから注目されている。田中裕介氏は、大分市羽田遺跡や賀来中学校遺跡出土の製塩土器は、いずれも多数のミニチュア土器と共伴して祭祀土器群を構成していると指摘している〔田中 1994〕。また、松根恭子氏も同地域の製塩土器が出土した遺跡について、祭祀遺物との共伴例が 20 遺跡中 5 例と比較的多いとしている〔松根 2004〕。ただし、豊後地域の事例は古墳時代前期であり、中期後半以降に出現する天草式製塩土器とは時期が異なることから、直接的な関連は認められない。

引用・参考文献

- 青柳泰介 2007「製塩土器小考—古墳時代中後期の奈良県を中心として—」『考古学に学ぶ』Ⅲ 同志社大学考古学シリーズⅨ、同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 諫早直人 2012「馬匹生産の開始と交通網の再編」『古墳時代の考古学』7 内外の交流と時代の潮流、同成社
- 五和町教育委員会 1984『沖ノ原遺跡—熊本県天草郡五和町二江—』
- 岩本正二 1980「製塩土器の分布と流通」『考古学研究』27-2、考古学研究会
- 植木町教育委員会 2002『石川遺跡』植木町文化財調査報告書第 14 集
- 大阪府教育委員会 2010『葦屋北遺跡』Ⅰ 大阪府埋蔵文化財調査報告第 2009-3
- 大林 元 1997「古墳時代後半期における塩の用途に関する予察」『シンポジウム製塩土器の諸問題』塩の会シンポジウム実行委員会
- 木本誠二 2003「内陸部出土の製塩土器—古墳時代中後期に関して—」『古代近畿と物流の考古学』学生社
- 隈 昭志 2000「原始・古代」『有明町史』有明町役場
- 熊本県教育委員会 1979『生産遺跡基本調査報告書』Ⅰ 熊本県文化財調査報告第 38 集
- 熊本県教育委員会 2010a『稲佐津留遺跡・西安寺遺跡』熊本県文化財調査報告第 263 集
- 熊本県教育委員会 2010b『小曾部遺跡・南請遺跡・高良柳迫遺跡』熊本県文化財調査報告第 265 集
- 熊本県教育委員会 2010c『玉名平野条里跡（古閑前地区）』熊本県文化財調査報告第 261 集
- 熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡』Ⅱ（鞠智城跡第 8～32 次調査報告）熊本県文化財調査報告第 276 集
- 熊本県教育委員会 2013『下江中島遺跡・上日置女夫木遺跡』熊本県文化財調査報告第 278 集
- 熊本市教育委員会 1999a「上高橋高田遺跡第 2 次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第 2 号
- 熊本市教育委員会 1999b「白藤遺跡群第 3 次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第 2 号
- 熊本市教育委員会 2000「渡鹿遺跡群第 4 次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第 3 号
- 熊本市教育委員会 2004「大江遺跡群第 79 次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第 6 号
- 熊本市教育委員会 2007a『大江遺跡群』Ⅵ（第 97 次・第 106 次調査区発掘調査報告書）
- 熊本市教育委員会 2007b「上代町遺跡群第 1 次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第 8 号
- 熊本市教育委員会 2007c『二本木遺跡群』Ⅱ（二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書）
- 熊本市教育委員会 2011『二本木遺跡群』ⅩⅣ（二本木遺跡群第 31 次調査区（B・C・D・E・F・G・I・J・L・M 区）発掘調査報告書）熊本市の文化財第 8 集
- 熊本市教育委員会 2012『二本木遺跡群』ⅩⅦ（二本木遺跡群第 31 次調査区（H・K・N・O・P・Q・R・S 区）発掘調査報告書）熊本市の文化財第 17 集
- 熊本大学文学部考古学研究室 2007「上天草市所在遺跡採集資料報告 2」『考古学研究室報告』第 42 集
- 近藤義郎 1974「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第 15 集、日本塩業研究会
- 泗水町教育委員会 1998『篠原遺跡』泗水町文化財調査報告第 3 集
- 田中裕介 1994「大分県」『日本土器製塩研究』青木書店
- 積山 洋 2004「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『畿内の巨大古墳とその時代』季刊考古学別冊 14、雄山閣
- 中原幹彦 2007「石棺輸送と製塩土器祭祀に関する試論—古墳時代後期集落成立の背景—」『大王の棺を運ぶ実験航海—研究編—』石棺文化研究会
- 長崎県教育委員会 1993『脇岬遺跡』長崎県文化財調査報告書第 109 集
- 林田和人 2009「天草式製塩土器の終焉」『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』佐田茂先生論文集刊行会

- 藤本貴仁 2004「天草式製塩土器の再検討」『熊本古墳研究』第2号、熊本古墳研究会
- 藤本貴仁 2007a「熊本県」『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』第56回埋蔵文化財研究集会資料集、埋蔵文化財研究会
- 藤本貴仁 2007b「熊本県域における古墳時代の土器製塩について」同上
- 藤本貴仁 2009「天草式製塩土器の形態変遷試論－碗部を中心に－」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、熊本大学文学部
- 藤本貴仁 2011「天草式製塩土器の流通に関する基礎的研究」『熊本古墳研究』第4号、熊本古墳研究会
- 藤本貴仁 2013「九州における土器製塩の波及と製塩土器の運搬」『古墳時代の地域間交流』1 第16回九州前方後円墳研究会熊本県大会資料集、九州前方後円墳研究会
- 松根恭子 2004「九州の土器製塩研究」『熊本古墳研究』第2号、熊本古墳研究会

挿図出典

図1：近藤1974を一部改変。

図3：藤本2009より転載。

図4：以下の調査報告書より転載。玉名平野条里跡（古閑前地区）については一部改変。

玉名平野条里跡（古閑前地区）：熊本県教委2010c、篠原遺跡：泗水町教委1998、石川遺跡：植木町教委2002